

和漢詞德抄序

屋ま少秋の徳らううとまいねどし

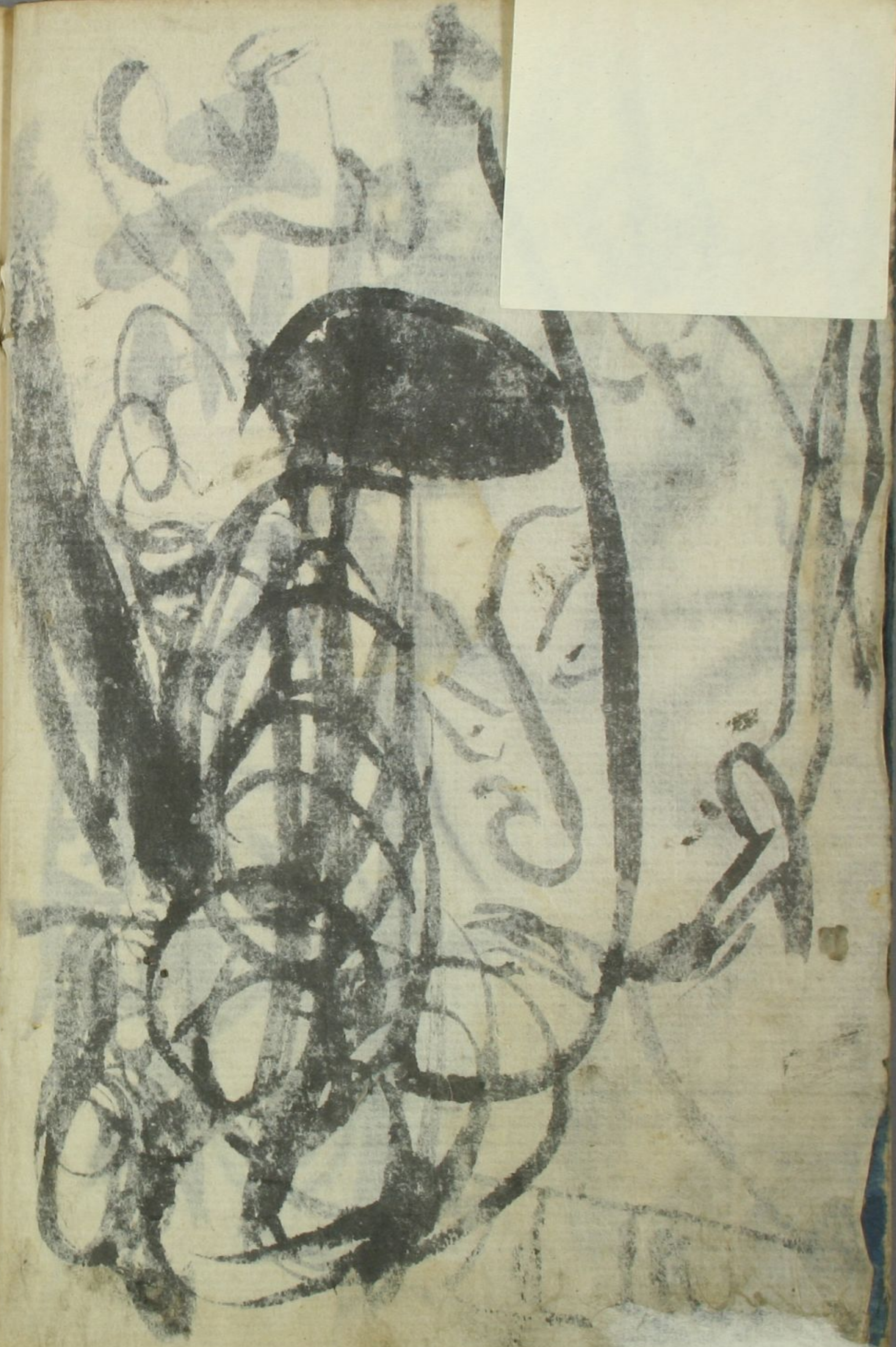
天比を動う一眼みえぬ鬼神とも

あま終とたりる男女の中も初る事

猛夫乃あ活をも厨うと也うりやとろ

威徳ありし例を輯いばさる人

梓也行と物ごり種せしを今うら



百と習と^り 録^る べしと^{のち} 後^{けい} 京^{けい} 師^し 表^{ひょう}
 西^{あに} 川^え 浪^{なみ} 花^{はな} の 月^{つき} 圓^{まる} なるが 畫^え 冊^{さつ} ありしきの
 よめしきと 冊^{さつ} 子^こ と ちせし 意^い 粗^ろ み ころりし
 けしきと 連^{れん} 袂^{たもと} まさころ 誹^{はい} 諧^{わい} 乃^の 句^く の うへ ありし
 徳^{とく} ありし いまも 著^{あつ} 述^{じゆ} ぞ 異^い 國^{こく} なるも
 詞^{あしと} の 感^{かん} ありき 殊^{こと} 冊^{さつ} 唐^{たう} 乃^の 代^よ 小^{せう} 多^た
 かりし ありし ころりし 見^み 事^{こと} 他^た の 語^ご 一^{いつ} 筆^{ひつ}

志^し 終^{しゆう} 乃^の 冊^{さつ} 遺^い まるかと 拾^{ひろ} いし 今^{いま} の
 けしきも けしきありし 先^{せん} 乃^の 詞^し 徳^{とく}
 表^{ひょう} 乃^の 冊^{さつ} 遺^い まるかと 童^{どう} 蒙^{もう} 冊^{さつ} 志^し 終^{しゆう} 乃^の 先^{せん}
 言^{こと} 乃^の 葉^{えつ} の みら 飛^と 身^み に せん と 諸^{しよ} 風^{ふう} 士^し
 冊^{さつ} 賞^{しょう} 與^よ 言^{こと} 乃^の 誹^{はい} 句^く と すめ 畫^え 人^{にん} 小^{せう} 尾^び
 乃^の 圓^{まる} を ね ぎ なるき 乃^の 全^{ぜん} 部^ぶ 二^に 冊^{さつ} 也^{なり}
 乃^の 申^{まを} 椒^{しやう} 堂^{だう} に ありし ころりし 也^{なり}

在土神田玉池

一陽井意外

安永八年己亥冬

和漢詞德抄上之卷



大納言經信

兼曆二年

殿上

乃

欽合

中

經信

卿

君が代ハ晝トヤぞ思フ神風や御裳濯門のすまひ限
斯よみハ其後あらん乃夢み屋装束の女多ク居並び
吟ト感歎して此欽中依ク帝王乃御寶算も増長候
るしやぞ果々御齡めをそらり也

初夢や御代と思ふの共はと 栗堂
壽毛はさめぬらん乃春の川 龜齡
巨ハ水すしをかう神ちろ 水哉



後醍醐天皇

後醍醐帝いそぐ大和のうらふとて一翫を結ふいそぐに夜より

夢終べんくういあつて稲荷乃社のまんと可せまひく

鳥羽玉乃くうに言路おはよるう我にうさかんさるの灯

聖休あがみ給ひたかみ社乃上よりいそぐに雲乃一むり立

如く除業の道を照しおらうて大和のうらふといひみつり歩

むら雲いり糸乃御嶽とて消失にたかるとぞ

福妻や何くうかろぬ君がる梅郊

津守園墓

津守のふ巻住吉經營乃石をよめいと紀伊園にまろし時

玉津島明神によみく奉る款

年ふとど老もせだして若の浦お幾代お成ぬ玉津島姫

其和夢に唐髪あげて裳履衣まらる女十人むらうと出きこり

て嬉うれき慶たのみふりやて取とりて石いしやうも細こまやくに教しかた

玉たまと得えたり夕ゆふ下ひにあて浦うら乃の石いし寛かん麗れい

中ちゆう細ま言ごん成せい範はん

中ちゆう細ま言ごん成せい範はん卿きやう花はな乃の盛さかの程ほどき心こころ歎なげて恭たひふ府ふ君きみとあや
けかゝる天あま照て去さ神かみみ祈いのつて

千ち早はや振ふあゝ人ひと神かみのうみそれは花はなも難よいのみまきかた

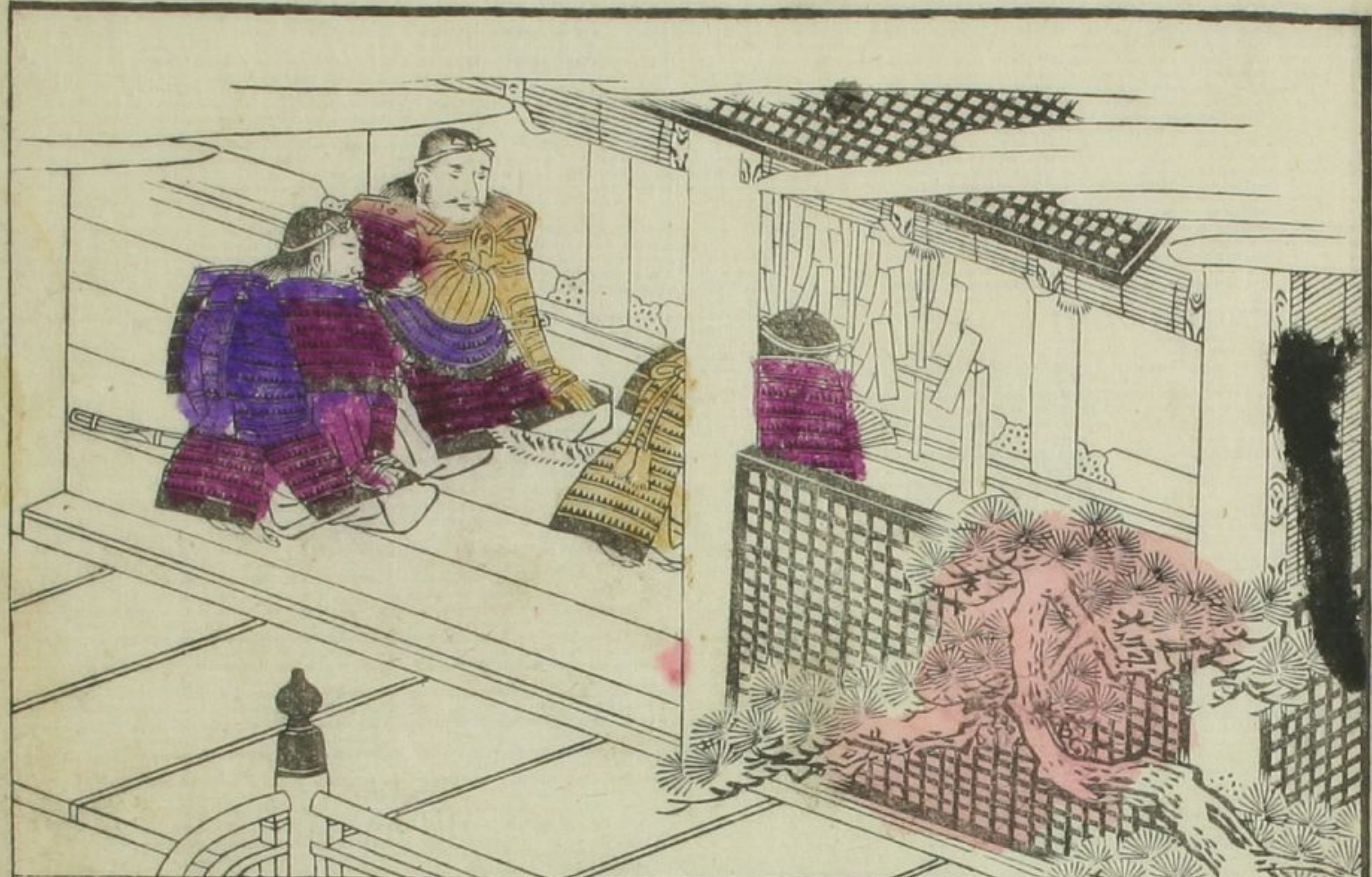
神かみ初はつ受うありてや七なな日ひ成せいと延のびし也なり君きみ御ご感かん乃のあまると勅ちゆう

書ま小こ揚やう町ちゆう中ちゆう細ま言ごんとを伴ばん々々

吹ふくをきりあゝ人ひとをも花はな二十にじゅう日ひ 吳ご夕しゆう

常じょうよ祭まつりの飲のみよほむ此こゝはくを 吳ご仙せん

兼かね兵へい衛ゑ佐さ頼らい朝あさ



頼らい朝あさ之の栲か山さんの軍ぐん敗ばいまで安あ房ぶ困くわん

洲すの邊へ一いつ時とき洲すの明めい神かみや

八はち幡ばん大だい菩ぼ薩さつを祀まつひなりたりけ

源みなもとのたをどながれぞ岩い清せい水みづ

せれあげくを云い乃の上うへまで

斯かかひ續つを通と来きしを曉あかつき方かた

小こ御ご資すけ殿どのよ

千ち尋じんまでぬく糸いとを岩い清せい水みづ

そをせれあげよ雲い乃の上うへまで

其そのかさほく霊れい夢むありて後のち小こ
本ほん意いとぞとげみきる

せにあげく照るや天下に水の月 兵竟

三熊野詣女

三熊野系詣乃女音多し門の邊よりと降されたり

音多しれ川のなれの流るを罪乃深ええを流る

其後乃とれく詣り奉と得しなり

秋多響く音多し川や輝の聲 素琴

江都督

江都督安楽寺を曲水宴と約し自ら書し序の文多曰

竟母廟荒春竹添一掬之淚徐君墓古秋松懸三尺之霜

披講乃とれし神廟乃動と

文や花今を世多し神と卿公史

相規

安楽寺作文乃序と相規が書多る

王子晋之昇仙後人立祠於候嶺之月羊大傳之

早世行客墜淚於岷山之雲

此句殊多すぐ後乃月のありを直衣の人詠と

乃乃天神帝感乃あまの現を結いりる也

香を吟どもよや月多梅の風 玉圃

西行法師

西行法師讚別松山宗徳院乃浄法と尋する

しや君むしれ玉の床をもちん後いなりせ

御廟多感とさせたまふ多乃きあえし也

かたをば乃こ床しを敷五州の露 高岩 露水



鎌倉右大臣

建曆二年七月洪水天を記しきり実初々

時およむるれば民乃歎なり 八大竜王あえやめり

雨をばく人民さし年かたりぬ

武女文うあさごあや旁の海底と一巴

吉野帝

後醍醐乃みくせ五月乃さる行業ありける小道の社より

篠とほくぬく降つぐき終り

あいる紙丹世の社お祀らじ祈るべしよ六月夏のを

中詠どさせ給いければ時ふらり日相やめぬ

そ終もを降びざり

日もはかりあえがさなる六月空 涼山

鳥丸大納言

あつゆの夏あゆむるそ終り鳥丸光廣卿根津乃圃

萩庄日吉明神あきのつむぎあきを祈いのちりて

雨雪あまぐもとわかれ祈いのちる日吉ひよしのや人ひと乃のちせよ一ひと木きをよみ

田いりを青あせむ日ひよりや晴はらみかろよあ久く 米こめ仙せん

田いりと畔あせも日ひよりよ五いはし欽うきすまじし 笠かさ齋さい

讀よみたまふ其その後のちせよ一ひと田いり植うへて 紫むらさき葉は

又また同どう園えん上じやう宮みや天てん滿まん天神てんじん祈いのちりて

思おもふまをたがひけ民たみ東ひがしいまはらうにいのちをよもあれわだこ恵めぐみ

感か應おうありきふよあ篠あしとみぞうて苗なえみどりりるあ也なり

民たみ草くさも志こころげふやあと君きみが恩おん 南なん部ぶ森もり岡おか 芦あし皓こう

同どう十じゅう年ねん同どう卿けい 賀か茂しげの社やしろ祈いのちりて

降ふりはなそあひ志こころげばや水みづを月つきの空そらに十じゅう日にちの時ときかたれ

雨あめ降ふりいづしが日ひ粒つぶやま候さむかひして又また民たみの歎なげ々々ふよとき可かて

あ雲くもと晴はれととほそを祈いのちふられ別わかれ雷かみなり乃なり神かみのまなく

祈いのちりてあ久くを祈いのちりて人ひとよらあひあり

照あきらや青あお田で和わ平へい雷らいの神かみいさめ 紀き亮りやう

雷かみなりをなうや志こころげやく雲くもの峰みね 舟ふね子こ

夕ゆふ立たや十じゅうりさてもいづるいづる祈いのちりて 分ぶん香かう

同どう卿けい吾われ妻つま母ははくらとて夏なつ別わかれ三さん崎さきの澤さわ祈いのちりて時とき雨あめいそく

降ふりり箱はこ根ね山やま越こえかりけよ能のり因いん法師ぼうしが伊い豫よ園えん一いつ宮みや

祈いのちりて祈いのちりて水みづせれたあよ天あま門かどあはも三さん崎さきの神かみの恵めぐみ

雨あめあらく晴はれり其その日ひ山やまを越こえたり

欽乃汀きんのみきくや箱根はこねの梅雨つゆ日和ひより 久喜くき 雀舟すずねふね

昌琢まさたく

竹門様たけかどさまお力をちから雪ゆきの舞ま句くははつつとと昌琢まさたくお作おせ有あり多たん

千町田ちまちだをを一味いちゐののぬぬやや春はる乃の文ぶん

其日そのひああ免めんゆゆりりてて野の山やまもも咲さけけりりととううややななりりきき祭まつり

世よととたたももふふ人ひとおお一味いちゐややううららままおおめめ 雅郊みやう

寶井其角たけうかきかく

晋子しんこ暑あつととははくくりりここちちおおとと

鴻田こうでん門かどかかううくくのの圍かき乃の邊へりり

唸うん行ぎやうせせいい農のう人にん早はや敷しきとと

愁しゆるる久くあありりここ圍かき乃の村むら老らう

晋子しんこかかりり事こととと同おなてて雪ゆきのの句く

ととししいいるる心こころとと共とも許ゆるさされればば

夕ゆふ立たやや田でん瓜うりをを免めん

ぐぐりりのの神かみささららばば

翌あした日ひ大おほ敷しきととかかしし晋しん子こがが

英えい名めいるる瓜うり室むろにに舞まとと此こゝ

夕ゆふ立たやや乃の又また文ぶん字じ免めんきき

てて今いま批ひ評へうすするるももののあありり

感かん應おうああるる

ううららをを論ろんすすららばば

ねねよよううららをを論ろんすすららばば



宮仕しきりて帝御賜しし時款上りて貢御の事せ
 ちじと作ありき終べ

君が代廿二万乃里人殺さし今も侍方貢ありか

此款の公へ白王極帝新羅と責多し内備中の國下津井の郡

一郷より二万騎の軍兵ありきと史より彼郷を二万乃

里と名付也はるばる彼人殺み准へて君の御命久し

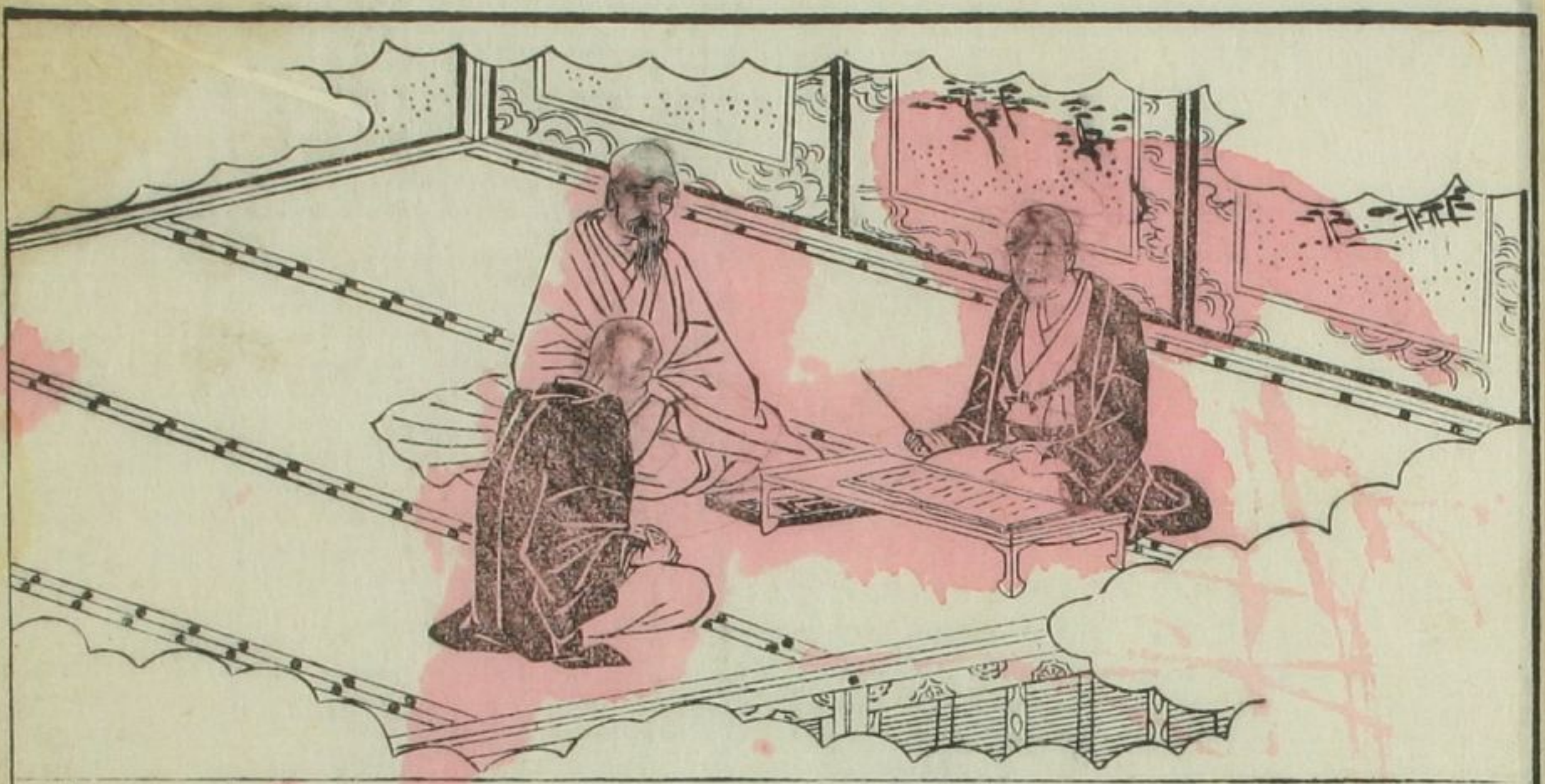
る事と續けりけし目かたやそりて貢御もすみ

清徳もさし勸賞に侍従みかされきりきり

言の葉乃貢や二万の里乃秋 寶春

宗祇法師

後柏原院御瘡王治りてせまりとて宗祇とて御祈



禱乃連款ありきり

露おろそ松の蒸煙き且つか 宗祇

雲乃松さりと拂ふ秋風 宗伊

在明の日はせみ成て乾もほ 宗長

影もかく清ききよくたせり也

松をきりてねり

下りて露拂

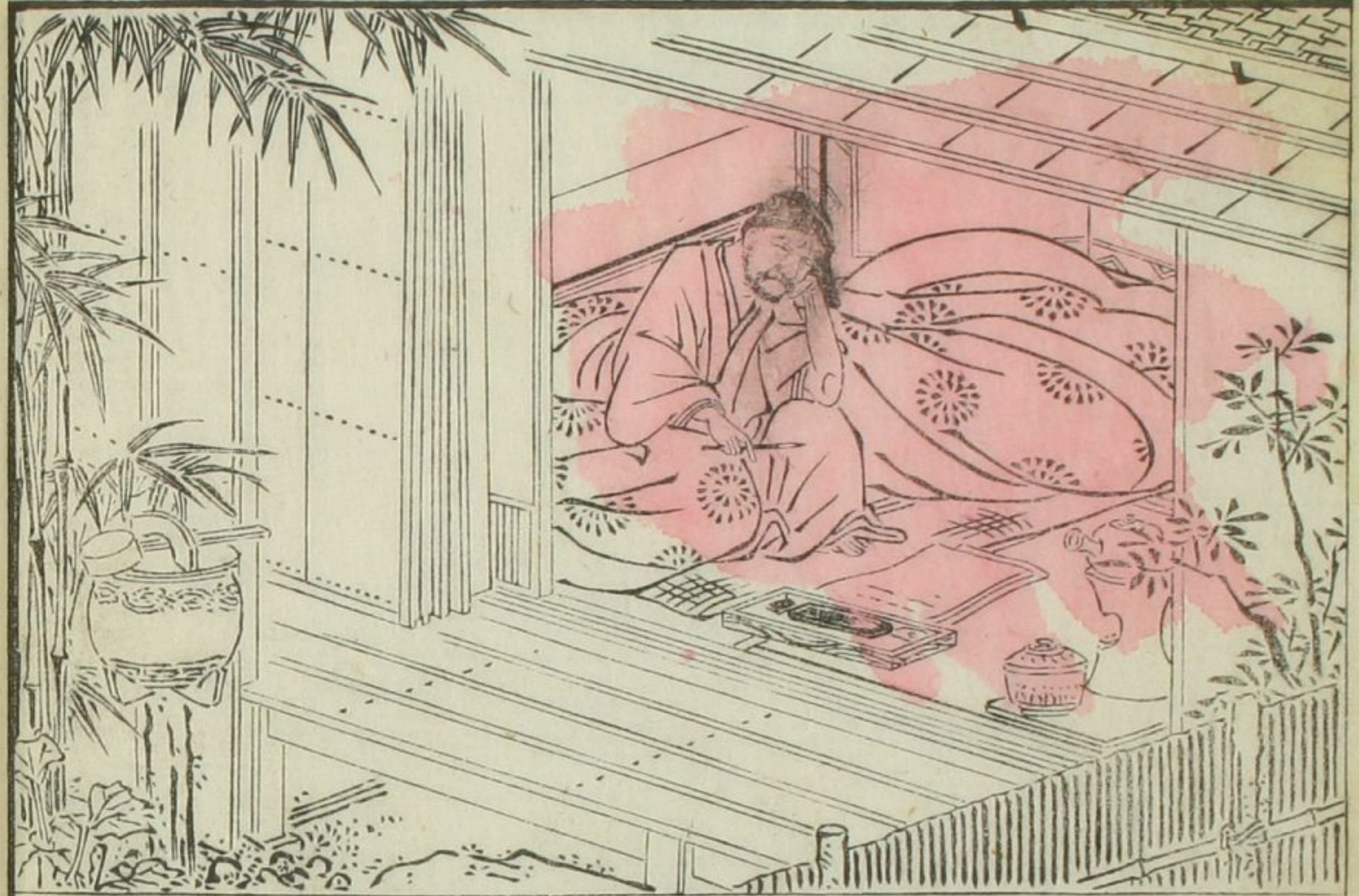
輕舟

高島玄札

あるや玄札瘡病みちわむ其方醫

術あれ種く良劑を書き示さる

なくて次第に学々から我年来未の



然る誹謗乃眞もかゝりて
 ちを望海くれもいふあて

卯のこかぬ

落ふ風乃

かちりうか

此一句にまづき獨吟せしに
 百員いまで満ちるうらむる
 うはるぎ日あはれ気せし也

卯乃をれや

風の子孫と

素麗

名もたさる

寶晋齋

其角父俄みれき煙いゝ家が其いゝみぐれ會ありて使
 そびくみおとふはるるはも彼席みれもむさねはるる也
 父乃事れもいひはるる也

秋とつ風い身にしむ茶う那

此句とや知く一折さるるはみちるうらむるを告るるなり
 妙感いれれごとくもいひも自らるるなり

感應乃發句も身に志む茶うか 素芥

杜子美

杜子美瘡とやむ者と訪して曰我詩とそつく是と療せよ
 たらはらに落るる病者其詩を問

夜 雨 更 秉 燭 相 對 如 夢 寐

此二句と誦とん瘡る成落ども子美が曰まこと更我詩を誦せし

子璋 鬪 髀 血 模糊 手提 擲 還 崔 太 夫

と人のぞと誦せし果て落るや

朔 風 や 擲 木 と 木 相 一 葉 百 桂

菅 魚 相

昌泰三年九月十日の宴に菅家へ正三位右大臣の大臣を

内中作らせしが其時作らば

君 富 春 秋 后 漸 老 恩 每 涯 岸 報 猶 遲

主上淑感のあまや清夜とくをけを後へ也

給りり一時乃錦や老楓 兵朝

橘 直 袴

天曆の時時文章博士橘直袴上書志く民部右輔を

志ひと請其書小野道風を借く浄書に書かひいつか

事かをて龍顔むやうなうらうらうが未乃辰か

瓢 箪 屢 空 州 滋 顔 洲 之 菴 藜 藿 深 鎖 雨

濕 泉 憲 之 樞

爰に到る是を誦りし事教多きべ賞歎あさけ即日

詔志く民部右輔か任せし程もか此書文中の筆と云

誠か愛敬すべしとて常に御床の傍かむき結ひしが其

後天徳の炎上かを直袴が書い火とまぬけりやとほ守りしを

翻筆にありに惠や秋の雨 李克

宿直童

後成御伏見に侍る夜をすし歩約にありれ宿直童
乃去ぬるを詠か奇

本懐ふ裾巾ありし寒けも伏見に里かゝる神もね
これを写くあはれ小袖と腰をむら下臈の志るほると
よものといふもさやうし也

志留綿 やつたる花の童菊 紫竹

源後頼

堀門院乃御時息男後重式部丞所望の申文お副と
よみ奉りきふ秋後頼御は

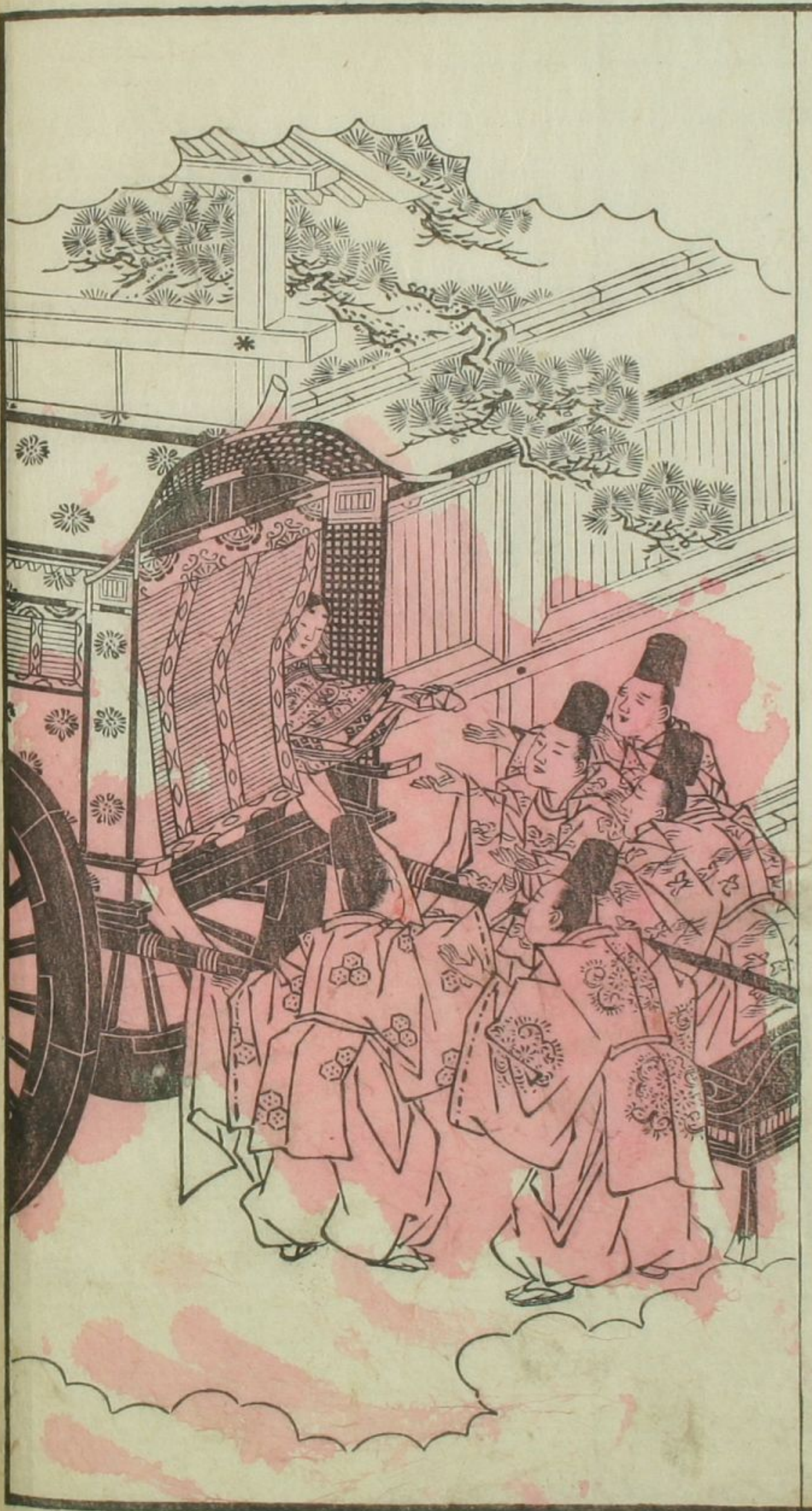
日乃光りあす秘きをれりきあも我身はらゝの雲かたれは
かろりあや宣言と兼りく因防内納

何れかよふ春の嵐も雲をわくさるに頼の君好むをんむ
経るく拜任ありしなり

藤原清補

關白殿近衛の御所女房の車をの帯に人々集り居し折ぐ
女房れ方より蕙物一ゆらりと出れ越中守顯成きとんやうて
又家母蕙物小あはれは皆く多し分教せし翌日まは下初
候むけの清補御は在り女房の舟より書状と送付秋あり
蕙物もあはれおとこの経つてえぬ

くく奥とやりて清輔きよすけも譲ゆづり清輔きよすけ無なんやが外が見み
 譲ゆづりゆづき人ひとなりなりももささべべのの死しんんと思おもひひららば
 玉たまぎぎののみみのの心こころよりより出いりりぶぶををととれれままののとと誰たれもも志こころりりああり



小政所こせいじよ所しよ一ひとりり御ご感かん極ごくりりままてて美みのの薰かほ物もの一ひと囊ふくろととてて給たまひひしし也

方かたかかああららめめででききにに物ものやや花はなのの風かぜ 亀かめ文ぶん

清輔きよすけ朝あさ臣みこはは三さんつつ加か級きゆうありりししいいふふ款くわんのの勸かんとん賞しょうなりり始はじめめめ百ひやく首しゆのの内うち小こ

梅うめの花はなににほほじじ招まねりりいいけけるるががうういいつつねねらら枝えだ乃の咲さかかららししん

此こゝ所しよをを小こ政せい所じよおおれれ之これ志こころめめああいいくく朝あさ勤ごん乃の行ゆかう幸こうれれ御ご給たまひひをを從まご五ご位い

下げ冊さふ叙じよをを其その後のち新あらた院いんのの御ご給たまひひをを以もつてて漏はりりくくババ三さん月げつ二十にじゅう日にち以もつてて事ことの

ははいいづづ冊さふ奏そう聞きせせりり歟や

位い心こころををいいのの賞しょう人ひと志こころままはは音ねののななががほほくく春はるとと待まちりり邪よこしま

明年あしたねん御ご給たまひひ所しよをを以もつてて正ただ位い下げ冊さふ叙じよとと又また先まへ蹤あととと追おひひてて叙じよ位いの

ととにに故ゆゑをを羽は院いんのの申まを文ぶんにによよりり歟や

ややへへくくのの人ひとををいいののががりり位い心こころににああららわわるる方かた小こいい苦くるししききるる

是の其方位母叙もべき時の二夜まで漏る昆舟等の四品
至りまればゆりしる事と木もいあめく詠せし也か
御感ありて其後四品母叙も有る事にあそ

吐風
素行
麻布
素月

藻壁門院女将

女将の信實朝臣の娘して叙に其名高し

おのが音につく衆列のありしは母思ひも志すて名や
け欽定家御感賞れあまを今集と書其志すわえら
起つれ新みうみも夏れあわ 聲我

三河守大納言定基

ある日定基のそと女の鏡を賣
に其りもる間よりてつるは陰裏紙
乃かうむしきに鏡と包紙を書

きあむしきみかに涙の十寸鏡

河舟一叙と人母かてはか

定基道念を致しぬの折るはいつ
象を十斛を車に載其人母か

と遣しきりしと

見ぬ叙と
みふよりあや
夏の月
冠車



凡河内躬恒

亭子院月のいとねをしるるも長躬恒とめて御遊乃
朽く月をらるりやいつの何のゆゑ其由はまらまると作をたれ
照月を弓張とてそのまの山をとりていれなりきり
帝をせむしく福み大うらき給りきり

感ありやき給乃的り月名弓 素玉

右田道灌

右田道灌上洛の時正親町院より都鳥の幸は身あり
きふによみ奉る歌

年ぬきど我まごあぬ給もすも河原に宿いあれ

御感ありて下さ給る御製

武藏野の浅茅が原と同はるるか詞のたも嘆たり

此御製によりて隅田河のあつりと浅茅が原と呼侍る也

ちりや今も昔と華乃都鳥 歌郷

吉田兼右

後水尾院小田御幸の朽く田の中に虎倉ありきるとるをか
志く耕作の愁とをなすべ取れまよれ勅命ありきれば志右

ちりといのちのみるるれど小田の徒るるぬかりなるもり

此寄に志させむらきまといこゝをれきり

早乙女の守りや老の田極る 梅壽

神の宮孫が詞も時のかりか 雀舟

隆奥園主

陸奥國むつしのくにの守勅撰しゅてつせん冊ふ入りつじふふ成願ねがひ々ふ支度しどまで詠草えいそうと
あるあるるされくくばば之の光院殿ひかりのいん歎なげききややせせ一いっ款くわん

かき流ながるる深ふかくくももなりなりややもも此こききままいいふふととままれれ和奇わぎの浦波うらなみ
正親町院ただちか親のまちのいん歎なげ感かんありありて新續しんぞく古今集ここんしゅうに入いりり也や

晴はりりかか和奇わぎれれううみみもも波なみのの月つき 執舟しやくしゆ

伴正曾

東都とうとの市人いちにん亦また伴正曾ばんしやうそうとと中院家なかつのいんけの御門人ごもんにんとと款くわんと嗜たしひ
そのあり又飛鳥井家あすかのいけの御守子ごまもりこと成なるる源鞠げんまき冊ふををささじじああつつくく
愚おろむむつつたたのの袴はかまをを袷あぐぐいいううとともも貴人きいんううででいいなりなりががたた由ゆとと
案あすすそそごごほほむむいいゆゆうう有ありり終はるる
紫乃むらさ久ひさといいききけけどど深張ふかぢやうもも葛くわののええののううみみ盡はるるせせがが

け奇けととああららむむ結むすひひ門かど牙が中なかへへ御ごささととりり此こ上かみ愚おろ紫むらさとと許ゆるされれ也や

款乃德くわんのちとくどどありありくく露つゆ乃の葛くわ袴はかま 順翁じゆんおん

長頭磨貞徳

後水尾院ごみづのおのいんいいままどど仙洞せんどうややりり奉ほうりりととままらら貞徳ちやうとく冊ふををななせせとと
乃の勅命しよくめいとと七しち鳥丸とりまる光ひかり廣ひろ御ごのの亭ていへへらられれ六む首くびのの御ご題だいとと載のせせ
其そのうう御料理ごりやうり之の寸すんままでで下くだされれるるにに御ご題だいのの款くわんへへ俾まりりとと
和奇わぎ一いっ首くびととよよみみくく奉ほうふふ

有ありり新あたらししきき款くわん乃の御ご題だいをを下くだされれるる亦またやや志しををごごりり也や

此こ狂くる奇き慮りよみみかかららんん大納言だいなごんのの局きやうととままらら御ご董どう物もの紙し
下くだしし給たまりりききりり時とき

ちちよよくくととままげげいいををたた物ものののほほれれををいいああままりり恐おそれれててだだままりり香かう合ごう



いよしく天機てんきらうらうらうと也

一種いちしゆより 津宜

五首乃御礼ごれいの

うし 軽かろ

香かぞ深ふかし 田機

だまの香合かうご

苔つがじ梅

平等院僧正

傍たもと正行乘ましろり諸玉しよぎよく御ご行ぎやうしる

きふか骨ほねまでおんえたれたれば麻あさ

ゆりゆりそらそらをりをりによりによりゆゆくくたたい

せし不と津守つし因重いんじゆう馬まあありてりてるるとてとていいくくををららふ

あさうげあさうげああすするる夕ゆふすすみみくく那な

僧正そうじゆう同どうくくややりりああははは

日ひぐぐううーー乃のききささななくく都みやこみみむむりりははももととく

因重いんじゆうねねととららきき馬まよりよりりりてて己おのがが家いへへへ付つくく響ひびききももり

啼なげううとといいあありりししととししととやや麻あさみみ蟬せみ 標しるし舟

寝ねくくやや附つききををとと蟬せみ乃のううはは夜よ素す登のぼ

李り義ぎ府ふ

右宗うしゆう皇帝てんていあありり附つきき李り義ぎ府ふととるる馬まをを詠えいせせししひ

日ひ裏うら颯さつ朝あさ彩さい

上かみ林りん如ごと許く樹き

琴こと中ちゆう聞き夜よ啼なげ

不ふ借か一いつ枝えだ棲すま

帝曰何ぞ一林のみさう人や卿母全樹をわくすまうらんや
叔慮あさうばしを位とすめ給ひかなむ

昇日乃時りあやうり 初鳥 枝静
己がものとかりや月夜の森鳥 過橋

良清

菟玖波集と撰まわし時貧賤かりとて良清其列とらふら
ま終ひ

足かくて登りひる菟波山秋乃道ぬ違者あがうを
此狂言により撰者みくられ一也

歌一首杖ぬほくむや電ふ月 素貫
違者うか峰乃雪ぬをおもへ入 素磨

周匡物

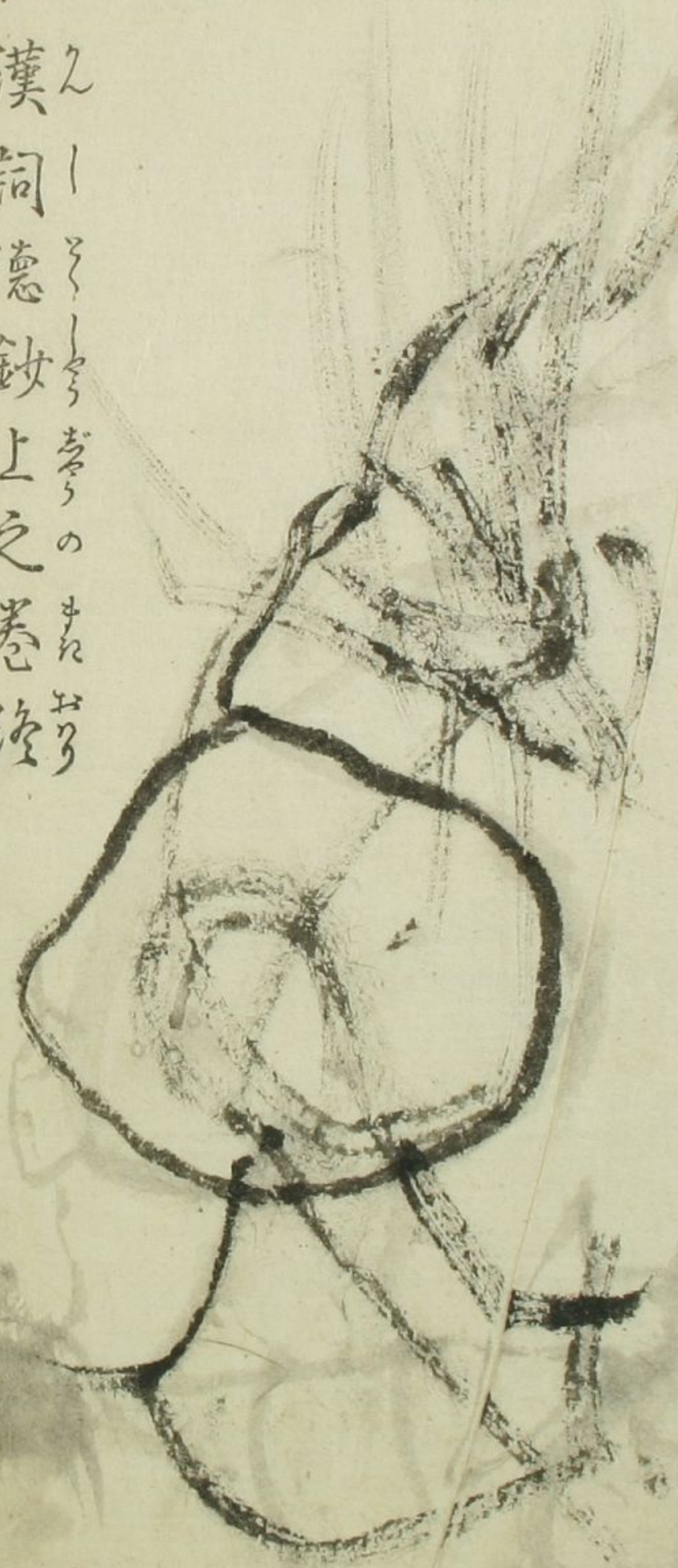
周匡物字の幾本潭州の人也
よく詩を作りて時名高し人の
す先ひよりて官ぬは久事成
望ぬやも家全ひし七路費巨
まれば徒歩ぬく都ぬ登る錢塘
坐し所ぬ到ふし船賃調なひで
久しく流る事と得ぬ非ぬ
おぼれ詩と賦し七公館ぬ持ぬ
萬里荒く天塹遙
秦皇底事不安橋



金科民 鄧



和漢詞德鈔上之卷終



那牧 おきやう 銭塘江 せんたうかう 口無 くちなし 銭過 せんか 又 また 西陵 せいりやう 兩信潮 りやうしんしほ
津吏 つし 罪 つみ 鯨 けい 船 ふね の せ 渡 わた せり
吹 ふ け 溜 る も や 言 こと の 一葉 いちえつ おも 芝水

